令和２年度入学者選抜学力検査問題　後期日程

小論文（地域創造学類）　正解・解答例

Ⅰ

問１

＜解答例＞

環境、経済、社会の３つの分野が並列で提示されており、筆者が社会経済発展のための前提だと考える「環境」が単に達成すべき目標の一部に過ぎないと誤解されかねない印象を抱いたから（85 字）

問２

＜解答例＞

「強い持続可能性」は自然資本を人工資本等によって代替することは長期的な持続可能性の観点からは問題が多いとみなし、自然資本の制約を超えた成長が不可能であると考える一方、「弱い持続可能性」は自然資本を人工資本等によって代替可能であると考える（118 字）

問３

＜解答例＞

私は「弱い持続可能性」の考え方から「強い持続可能性」の考え方に軸足を移すことが必要だとする筆者の主張に賛同する。その理由は、自然資本が複雑なシステムによって成り立っており、科学技術が発達したとしても、人類がそれらを完全に代替したり、それらの制約から逃れたりすることは難しいと考えられるからである。例えば、漁業資源が豊かな川をせき止めて、水力発電ダムを建設したとする。弱い持続可能性の立場に立てば、失われた漁業資源と同等以上の金銭的価値を持つダムが建設されれば持続可能だとなる。しかし、漁業資源以外の地域の自然や社会に回復が困難な悪影響を及ぼす可能性があるため、持続可能とはいえないだろう。とはいえ、現行では「弱い持続可能性」の考え方が主流である。まずは、自然資本、人工資本と一括りにするのではなく、どのような自然資本のどの部分について代替することが望ましくないのか、具体的な地域において調査を行い、得られたデータをもとに様々な関係者が議論をすることが「強い持続可能性」の考え方に軸足を移す上で必要だと考える。SDGs への注目が高まる今こそ、私たちの社会にとっての「持続可能性」とは何かが問われている。（497 字）

Ⅱ

問１

＜解答例＞

ＬＲＴへの転換によって、転換前と比べて利用者が各時間帯においても増加した。通勤・通学に関わる 7 時からの時間帯や、17 時からや 15 時からの時間帯で転換後の利用者の絶対数

が大きいが、増加率からみると 9 時から、11 時から、13 時からの時間帯において大きく、昼間における増加にＬＲＴへの転換が効果をもたらした。(150 字)

問２

＜解答例＞
ＬＲＴへの転換によって、転換前と比べて利用者が各年齢層でも増加した。利用者の絶対数からみると、30 代、40 代、50 代の年齢層の利用者がおおむね２倍に増えて、この年齢層が主な利用者である。ただし、増加率からみると、60 代や 70 代の年齢層の伸び率が大きく、それら高齢者の利用促進にＬＲＴへの転換が効果をもたらした。(150 字)

問３

＜解答例＞
ＬＲＴへの転換によって、転換前と比べて利用者が各時間帯・各年齢層において増加した。図１の朝夕の時間帯や図２の 30 代～50 代の利用者数の増加から、通勤などでの利用者拡大が指摘できる。また、図１の昼間の時間帯における増加率の大きさや、図２の 60 代や 70 代の年齢層の伸び率の大きさから、高齢者が昼間にＬＲＴを利用するようになったと判断され、これはＬＲＴが低床車両であることや、駅間隔が以前より狭くなったことにより、高齢者が利用しやすくなったためと推察される。以上の諸変化には運行頻度の増加も背景にあると考察される。(250 字)
＊　図１と２は、富山市の事例に関して関係行政機関が公表している情報を参照しながら加工・作図したものであるが、問題文では受験の公平性等を保つために、そのことを記載しなかった。